教えの庭から

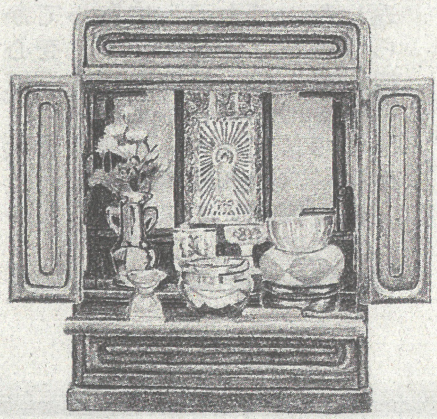
結婚祝いの仏壇

出雲市斐川町・仁照寺住職　江角　弘道

仏壇は、本尊様（仏様）と先祖様の位牌がまつってあるところです。その中心は本尊様です。そこが、実は家の中心であり、そのおかげで家族は生かされていると考えられます。

私たちの「いのちの営み」そのものが、太陽光や空気や水や食べ物とのつながりなしには不可能です。そのような「大自然のおかげ」があってこそ、人類は生きているというより、生かされています。そこを仏教では、仏様の「おかげ」で生きているといいます。そのことが、生きている中心と考えられます。仏様に生かされていることを感謝する場所が仏壇なのです。

檀家様が、新しく仏壇を購入されたときは、本尊様と位牌に魂を入れてもらう開眼供養をするのが慣わしです。その時、捕らえた魚などの生きものを解放して自由にする「放生会」という〝慈悲の実践〟をします。昔は、放生会に使う魚は、近くの小川で、すぐに捕獲できましたが、今はいないし床の間もない、ただなくて、やむなく生きた魚を売っている店で購入して用意されるようになりました。



挿絵　平尾恵郷

昔の日本の家には、床の間があり、その横に仏壇がありました。それらは家の中心です。ところが第2次世界大戦後、とにかく住めればよいのだと、住宅都市整備公団の人たちが仏壇もない床の間もない、ただなくて、やむなく生きた魚を売っている店で購入して用意されるようになりました。

昔の日本の家には、床の間があり、その横に仏壇がありました。それらは家の中心です。ところが第2次世界大戦後、とにかく住めればよいのだと、住宅都市整備公団の人たちが仏壇も地域の中心として祭りなどをする役割をしてきていました。そして、家には仏壇と神棚がありました。最近はその役割が減ってきました。

全国に普及した新興住宅団地ではスーパーマーケットなど生活するのに必要な店はありますが、お寺もお宮もなくて雑踏ばかりです。村や町から中心が消えて行きつつあります。

人間には生きている中心がないと、虚無的になって行きます。家に中心がないと、やがて家庭はバラバラになってゆきます。学校でも会社でも国家でも、長となるべき人が中心を持っていないとやがて崩壊します。

私は長女が結婚するときに家庭には中心が必要だとの思いを込めて、祝いに仏壇を贈りました。娘はそのことを「結婚祝いの仏壇」というエッセーで、本山妙心寺発行の花園誌（2011年8月号）に書きました。

その要旨は、「父から渋々もらった仏壇の扉を開けると仏様が鎮座しているので、手を合わせないといけない気がしてきます。いつの間にか、それが習慣化していきました。毎日手を合わせていると、自然と周りの人や今ある状況に感謝する気持ちがわいてくるようになりました。父が日頃からよく言っていた言葉『おかげさま』って、こういうことかと、ようやくそのときに父が仏壇を贈ってくれた意味が分かった気がしました。死を連想して縁起が悪い、なんて思っていましたが、今は、普段忘れがちな感謝する心を思い出させてくれるのが仏壇なんだという意識にかわっていったのです」。

娘のエッセーは、心に響くエッセーを掲載している『抜粋のつづり　その七十一』（12年、熊平製作所発行）に転載されました。